—広　告—

KIT
キャンパス
レポート316

文・杉村裕之

祖父の病気から薬学志望へ
研究テーマは脳神経の培養

中村 明衣梨（なかむら あいり）
金沢工業大学大学院工学研究科
バイオ・化学専攻
博士前期課程二年
富山県立滑川高等学校出身

家族への情愛とやさしさの伝わる取材だった。現在、取り組む「脳神経細胞の培養」という研究テーマも、脳血管疾患で倒れた亡き祖父への強い思いがあった。

くも膜下出血で二年間、入院し、つらいリハビリにも耐えて自宅復帰するまで回復した祖父。ただ、薬は手放せず、「飲む種類も量も、もっと少なくしてあげたいな」と、孫の目にはいとおしく映った。

ふるさとの富山県は製薬業が盛んで、中村さんは薬業科のある高校を選んだ。調剤や製剤の実習も経験し、同級生の多くが製薬会社などに就職する中、バイオテクノロジーを活用した薬品の可能性を学びたいとKITに進学した。

高校時代、履修できなかった生物、普通科より履修時間の少ない数学や英語のリカバリーは結構、大変だったろうと思う。それと並行して、バイオ技術者認定試験（中級）にも挑戦して合格。昨年の日本神経化学大会では、卒業研究を基にした「脳神経の発達を促す栄養因子の分析」が優秀賞（ポスター発表）に輝いた。その一つひとつに、初志を貫く不動の意思と努力がしみ渡っている。

薬学から脳神経へと歩を進めた理由を聞いた。「脳と周辺で起きる病気の治療法や治療薬を進化させるには、脳細胞を正常に働かせるメカニズムを探る基礎研究が極めて重要だから」。さらりと答えが返ってきたが、そのデータを集める実験は一ミリの百分の一を扱う世界であり、集中力と根気なしにはとても続けられない。

「ラットから脳を取り出す実験を初めて見た時、全身が強ばりました。『この命を絶対に無駄にしないね』と誓い、振動に弱いデリケートな細胞の取り扱いには特に細心の注意を払っています」

研究室の後輩の卒業研究に、中村さんが精度を磨いた細胞培養技術を提供したところ、創薬につながる貴重なデータが得られた。指導する小島正己教授は研究室を、「みんなで科学を解き明かす小さな会社」と表現し、将来的なバイオベンチャーも夢に描く。

来年春、大学院を修了予定の中村さんは、家族と一緒に過ごせる地元での就職を考えている。「困っている人を笑顔にする仕事がしたい。それが薬に関わることならば最高」と抱負を語る。

自己分析によれば、飽きっぽい性格の一方、興味のある分野はつらくてもやり通すタイプ。祖父に導かれるように関心を持った薬学を天職にできることを祈りたい。

金沢工業大学
石川県野々市市扇が丘七-一
電話番号〇七六二-二四八-二〇〇